

名古屋城本丸御殿障壁画を描いた絵師

慶長末年に完成した名古屋城本丸御殿には、多くの襖絵がはめられていました。昭和20年(1945)の空襲で御殿は全焼しましたが、襖絵などの障壁画千点余りは直前にとりはずされ乃木倉庫などに移されていたため焼失を免れました。戦後それらは近世初期障壁画の代表例として重要文化財に指定され、再建天守閣の展示室で画面を変えつつ通年展示されていました。現在天守閣は閉館中ですが、他館展示会への出品は行っています。

本丸御殿障壁画の筆者として、貞信、探幽、空之助という3名の狩野派絵師の名が当時の文献に記されています。3名以外の絵師も動員されたはずですが、史料に欠けるため、画風と狩野派内の序列によりいろいろな絵師の名が挙げられてきました。その代表が甚之丞です。昭和後期、甚之丞の基準作とされる「帝鑑図」という屏風との比較から、本丸御殿対面所の風俗図障壁画の筆者を甚之丞とする説が提出され、定説化しました。今では逆に、対面所風俗図が甚之丞の代表作とみなされています。ここで、この定説を見直してみましょう。

名古屋市の個人の方から名古屋市博物館に寄贈された作品(挿図左 以下「博物館本」)は、正月の綱引きや門付けという名古屋城風俗図(以下「名城本」と同じ場面を描いています。現在掛軸2幅に改装されていますが、紙継があることから襖絵類の



▲風俗図 2幅のうち1幅 名古屋市博物館蔵

断片とみなされ、名古屋城とは別の城を飾っていたと考えられます。

名城本と博物館本は、きわめてよく似ています。定説に例えば、博物館本も甚之丞作となるでしょう。

しかし、細部を仔細に見ていくと、かなりの差があります。足先に目を向けましょう。博物館本が地面を押す指と踵を生々しく描くのたいし、名城本はこの足裏感覚が希薄です。各関節の動きも博物館本の方が正確です。総じて博物館本には野卑ともいべき躍動感があふれ、名城本は優美な情趣で勝ります。

この差を生んだ原因として、描かれた時期の違いも考えられますが、甚之丞が弟子を抱え工房制作を行っていたとみなすのが自然です。

さらに、名城本がはたして甚之丞の作かどうかの根本的な検討が必要です。名城本は画面によって微妙に画風が異なり、しかもどの画面も甚之丞の基準作とされてきた「帝鑑図」とは様式が異なります。現時点での甚之丞とは、複数の絵師からなる一工房を示す記号とみなすべきで、この工房の絵師一人一人の輪郭を紡ぐことが今後必要と私は考えています。

同じような、いいえ、もっと大きな問題を、名古屋城障壁画は抱えています。障壁画史は多くの研究の上に積み上げられてきましたが、今なお発展途上なのです。

(学芸員 朝日美砂子)



▲名古屋城本丸御殿対面所次の間襖絵 部分

名古屋城 調査研究センターだより

2021
第2号 3

名古屋城調査研究センターは何を目指すのか?

名古屋城調査研究センター設立からほぼ2年が経過し、私たちはこの間少しずつ名古屋城の調査研究を進めてきました。その中では天守閣整備や名勝

二之丸庭園の整備のように、現在城内で進められている様々な整備事業に伴う、特別史跡名古屋城跡の保存活用に関連する調査研究が大きな位置を占めています。

整備事業は、特別史跡の「本質的価値」を構成する要素の保存やその価値の向上を目指して行われるため、それに伴う調査研究も「本質的価値」を構成する要素を対象として行い、それを具体的に明らかにすることが求められています。

では、その特別史跡名古屋城跡の「本質的価値」とは何でしょうか。「本質的価値」という言葉は、一般的な遺跡についてはあまり言われることがありませんが、史跡として指定された要件である歴史的・学術的な価値のことで、特別史跡名古屋城跡の保存活用の基本となる『特別史跡名古屋城跡保存活用計画』(以下『保存活用計画』)では、次の3つの柱にまとめています。すなわち、「御三家筆頭の尾張徳川家の居城であった城跡」「現存する遺構や詳細な史資料により、築城期からの変遷をたどることができる城跡」「現在の名古屋へと続く都市形成のきっかけとなった城跡」です。

そしてこれに基づき、「本質的価値を構成する要素」として「藩政期を通して名古屋城を構成してきた遺構」、「補完する諸要素」として「往時の名古屋城を知ることができる史資料や遺物」を挙げています。

こうした諸要素についての調査研究の重要性は取って置かずとも触れるまでもありませんが、私たちは、まずは特別史跡の「本質的価値」を具体的に明らかにし、それが適切に保存活用されるよう、調査研究を進めていきたいと考えています。

その一方で、城内には、例えば戦後に再建された現天守閣を始めとして、明治時代以降の人々の様々な行為の痕跡が残されています。それらは、「本質的価値の理解を促進させる諸要素」「歴史的経緯を示す諸要素」と整理されています。また、城内には、名古屋城築城以前の遺構や遺物も知られています。これらは、熱田台地の北西端にあたるこの地の利用状況を物語っています。

これらの遺構や遺物は、特別史跡としての「本質的価値」とはされていませんが、各時代の人々がこの場所をどのように利用したのか、名古屋城をどう見たのかを示す貴重な証拠であり、名古屋城の総合的理解にとっては、不可欠なものです。

また、特別史跡の「本質的価値を構成する要素」を調査研究していても、例えば後の時代に手を加えられた等の理由により、そうではないものと一体として、同時に調査研究を進めていくことはしばしば経験します。

本センターは、名古屋城内の管理部門や整備部門からは独立し、名古屋城について理解を深め、その魅力を明らかにするため、総合的な調査研究を行うことを目的としています。特別史跡としての「本質的価値」はもちろんですが、多角的な視点、幅広い興味関心をもって調査研究にあたることを目指したいと考えています。(副所長 村木誠)

ちょう ば わり す 丁場割図にみる名古屋城石垣普請 ふ しん

名古屋城の石垣普請

名古屋城は徳川家康の命により、慶長14年(1609)に築城が決定し、同15年に石垣普請がおこなわれました。石垣普請の際には、加藤清正や福島正則をはじめとする西国・北国大名20家を動員して土木工事を担わせる公儀普請が実施されることになり、諸大名はみずから指揮を執って、尾張・三河・美濃に点在する石材の産出地(「石切場」)から石材を切り出して名古屋に運び、石垣普請に取り掛かる準備を始めました。

同年6月3日には、石垣の基礎となる石材を置く「根石置き」がおこなわれ、本格的な石垣普請が開始されました。8月下旬には加藤清正が担当した天守台石垣が完成し、さらに9月になると、ほとんどの場所で石垣が築き終わったため、諸大名は自分の領国へと帰国しています。

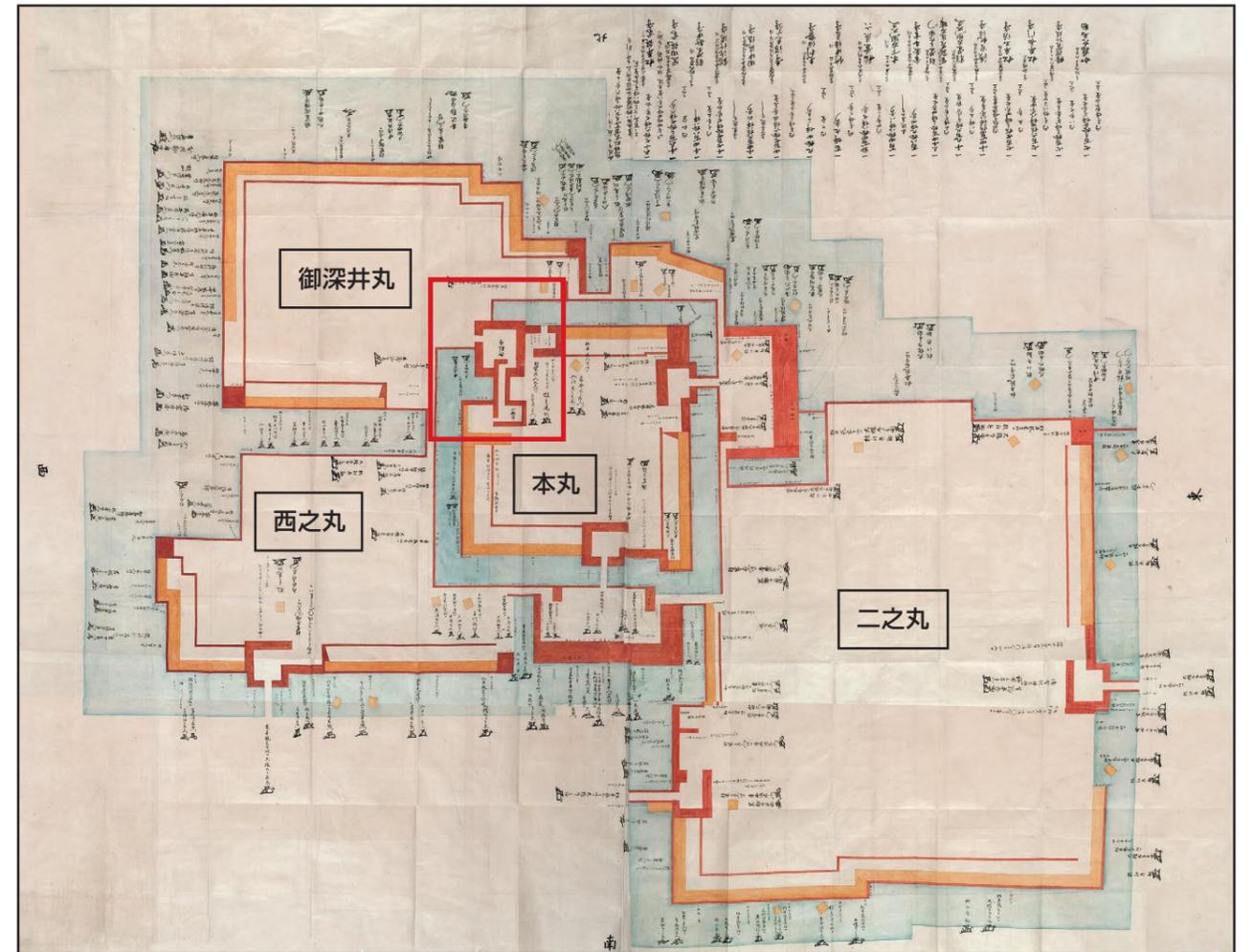
このとき大名たちによって、本丸・二之丸・西之丸・御深井丸にある石垣が築かれました。築城時の名古屋城の石垣は、大名たちが3~4ヶ月で築き上げたものなのです。

丁場割図の内容

名古屋城の石垣普請では、各大名に割り当てられた普請担当場所を示す「丁場割図」という絵図が作成されました。「丁場割図」には、天守台石垣の普請を務めた加藤清正を除く19家の大名が確認できます。さらに、本高(石高)を基礎に各大名に配分された石垣普請役の負担割合が記載されていますが、11家は本高より3割増の負担になっています。各丁場には大名の名前が記され、その下には大名に仕える家臣1~3名が花押を据えていることから、「丁場割図」は、各大名の担当場所を確認させるために、幕府の普請奉行によって作成された絵図であると推測できます。

順番	大名	丁場割図の記載名	領国/居城	役高	割増分	本高
1	前田利常	松平筑前守	加賀・能登・越中/金沢	134万2510石	三割加	103万2700石
2	黒田長政	黒田筑前守	筑前/福岡	40万3000石	三割加	31万石
3	細川忠興	羽柴越中守	豊前/小倉	39万石	三割加	30万石
4	鍋島勝茂	鍋島信濃守	肥前/佐賀	46万4146石8斗	三割加	35万7036石
5	田中忠政	田中筑後守	筑後/柳川	39万2710石5斗	三割加	30万2085石
6	寺澤広高	寺澤志摩守	肥前/唐津	12万3689石8斗	三割加	9万5146石
7	毛利高政	毛利伊勢守	豊後/佐伯	2万4700石	三割加	1万9000石
8	竹中重利	竹中伊豆守	豊後/府内	2万6000石	三割加	1万9000石
9	稲葉典通	稲葉彦六	豊後/臼杵	6万5078石	三割加	5万60石
10	木下延俊	木下右衛門大夫	豊後/日出	3万9000石	三割加	3万石
11	金森可重	金森出雲守	飛騨/高山	4万9923石2斗	三割加	3万8402石
12	池田輝政	羽柴左三衛門	播磨/姫路	80万7500石		80万7500石
13	生駒正俊	生駒左近大夫	讃岐/高松	8万5900石		8万5900石
14	福島正則	羽柴左衛門大夫	安芸・備後/広島	49万8200石		49万8200石
15	浅野幸長	浅野紀伊守	紀伊/和歌山	37万4200石		37万4200石
16	山内忠義	松平土佐守	土佐/高知	20万2600石		20万2600石
17	毛利秀就	松平長門守	長門・周防/萩	20万石		20万石
18	蜂須賀至鎮	蜂須賀阿波守	阿波/徳島	18万6700石		18万6700石
19	加藤嘉明	加藤左馬助	伊予/松山	19万1600石		19万1600石
20	加藤清正		肥後/熊本			52万石

「丁場割図」記載大名19家一覧表 ※「本高」及び20「加藤清正」の欄は「蓬左遷府記稿」より引用



「丁場割図」(「金城録 町場請取絵図」)名古屋城総合事務所蔵

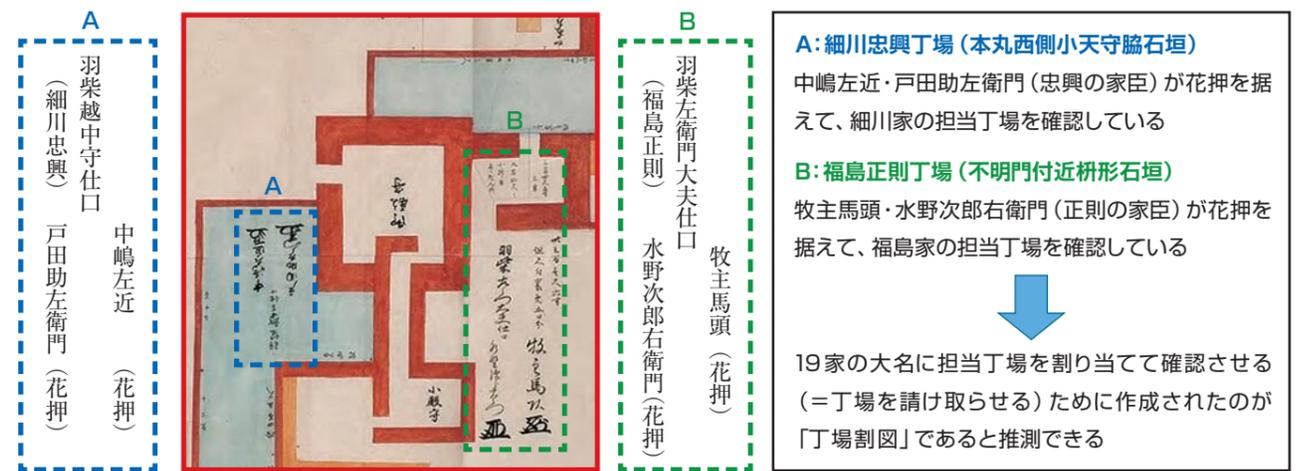


図 赤枠内 部分拡大

現存する複数の丁場割図

現在、名古屋城には丁場割図の原本は残されていません。明治26年(1893)から昭和5年(1930)にかけて名古屋城を管理していた宮内省によって、写本が複数作成されています。これら宮内省由来の写本は、現在では宮内庁と名古屋城総合事務所に所蔵されており、今回掲載した図は、宮内庁宮内公文書館が所蔵している丁場割図写本をさらに写した絵図だと考えられます。

また、他の丁場割図については、最近の研究により、靖国神社遊就館所蔵の丁場割図が、慶長15年に作成された原本である可能性が指摘されています。さらに、名古屋市蓬左文庫には、宮内省系統の写本とは異なる丁場割図が存在します。丁場割図自体は以前から広く知られている絵図ですが、現存している複数の絵図を比較検討することにより、江戸時代の公儀普請について新たな発見があるかもしれません。(学芸員 堀内亮介)